

(コラム)

これからの生徒指導とは

～ 課題性と時間軸を捉えて ～

藤川 聡（北海道教育大学）・ 永浦 拓（北海道教育大学）

I. はじめに

先日、部屋の整理をしている時に、筆者が中学校教員時代の学級通信を発見し、教え子たちの入学から卒業までを懐かしく振り返っていた。その中に、「我ながら、なかなか良いこと言ってるな」、「感動的だな」と思うものもあれば、「ちょっと恥ずかしいぞ」と照れるものや、中には「これは、自分の理想を押し付けているのではないか」と反省するものもあった。当時、生徒指導困難校であり、「本気で向き合い、全力で引っ張らないと生徒たちを救えなかった」「この時は、これで良かったんだ」という気持ちと、「自ら課題を見つけ解決する場面を奪ったのではないか」という後悔が交錯し、複雑な気持ちになった。

教師と生徒は、様々な場面で指導する立場、される立場となる。そのため、生徒指導においても、教師は自身の理想を無意識のうちに生徒に当てはめようとする傾向に陥りやすい。もちろん、社会規範を示すことは必要であるが、生き方に関する教師の価値観をそのまま生徒に投影する感覚は、これからの生徒指導にそぐわない。つまり、教師は立場上、そのような感覚に陥りやすいことを常に自覚し、生徒が自分から歩めるよう支え導く存在であることを自身で問い直せる力が必要である。

この度、生徒指導提要在12年ぶりに改定となった。ここで、改定の重要なポイントを二つ示したい。一つ目は、生徒指導の定義と目的が明確に示されたことにより、教師間で生徒指導の理念やあるべき姿の拠り所を共有することができるようになったこと、二つ目は、生徒指導の構造が課題性と時間軸から明示されたことにより、状況に応じた計画的な支援がより意識できるようになったことである。

本稿では、改訂された生徒指導提要进行を概説しつつ、これからの生徒指導について考えたい。

II. 生徒指導とは何か

ここでは、生徒指導とは何かについて、令和4年12月に改訂となった生徒指導提要（以下、改訂版）に即して確認する。改訂版では生徒指導の定義と目的が明記に示された。以下に生徒指導の定義を示す。

生徒指導とは、児童生徒が、社会の中で自分らしく生きることができる存在へと、自発的・主体的に成長や発達する過程を支える教育活動のことである。なお、生徒指導上の課題に対応するために、必要に応じて指導や援助を行う。

この定義から、生徒指導とは児童生徒の成長や発達を支える活動であることがわかる。決して、教師が確からしい価値観や規範を児童生徒に当てはめるといったものではない。次に生徒指導の目的を示す。

生徒指導は、児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支え、同時に、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えることを目的とする。

この文末に、「自己実現を支えること」とある。つまり、目指すところは生徒の「自己実現」、言わば「なりたい自分になる」ということである。それは、自分勝手に生きるという意味ではなく、文中からわかるように、「個性の発見とよさや可能性の伸長」と「社会的資質・能力の発達」の両面から支援し、「自己の幸福追求」と「社会の一員として受け入れられる」の両立を目指しているのである。

つまり、教師が考える確からしい価値観ではなく、他の誰かの生き方でもなく、「なりたい自分」になるため、自身の個性や可能性を自ら発掘できる力を身に付けさせることが大切なのである。

Ⅲ. 生徒指導の構造

前述の目的を達成するため、改訂版では、生徒指導の構造を課題性と時間軸から2軸3類4層として整理している。図1に2軸3類の構想を示す。

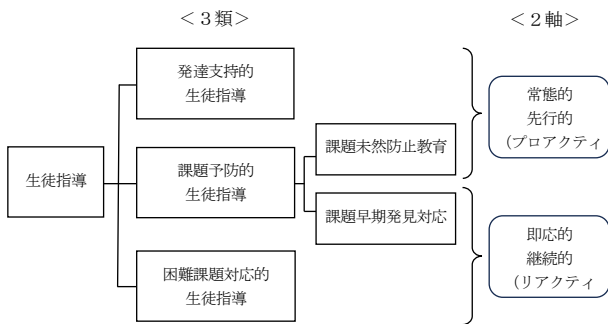


図1 生徒指導の2軸3類 (改訂版より)

図1のとおり、生徒指導の2軸とは、①「常態的・先行的 (プロアクティブ) 生徒指導」、②「即応的・継続的 (リアクティブ) 生徒指導」であり、課題への対応を時間軸で二分したものである。次に、4層構造を図2に示す。

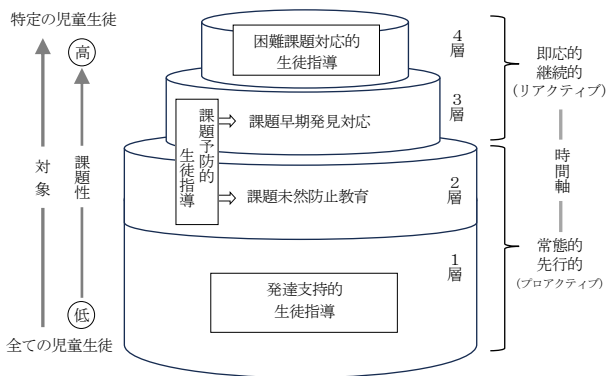


図2 生徒指導の4層 (改訂版より一部追記)

図2のとおり、生徒指導の4層構造とは、第1層に「発達支持的生徒指導」、第2層に「課題未然防止教育」、第3層に「課題早期発見対応」、第4層に「困難課題対応的生徒指導」としている。ここでは、課題性の高さや時間軸の視点から構造化している。つまり、第1層から第4層と上層に移行するにつれ、生徒の課題性が高くなり、時間軸では即応的となる。

第1層の「発達支持的生徒指導」は、改訂版から新たに登場した概念である。発達支持的生徒指導とは、「全ての児童生徒を対象に、児童生徒が自発的・主体的に自らを発達させていくことを尊重し、個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支えるように働きかける」(改訂版より)であ

る。4層構造の根底に位置付き、課題の早期発見、早期対応、予防などの基盤となるものである。

Ⅳ. これからの生徒指導

生徒指導提要是新しくなったが、これまでとは違う「何か特別なことをしなければならない」と思わなくてよい。まずは、これまで行ってきた取り組みについて、改訂版に示された2軸3類4層を参考に、教師自身、そして仲間同士で整理してみてもどうか。特に、改訂版から「発達支持的生徒指導」が課題の早期発見、早期対応、予防などの基盤に位置付けられたことにより、日常的な関わりがいかに重要かについて再認識することができるようになっていく。上記の整理により、反省点だけでなく、「1学期に学級で取り組んだ〇〇があったから、いじめが起きた時にうまく解決できたのではないか」、「日頃の先生の何気ない〇〇に救われ、生徒Aが登校できたのだと思う」など、自分では気付かなかった良さが見つかったり、計画的な指導につながったり、またチームで支援する土壌が培われたりするだろう。

これからの生徒指導は、生徒の荒れや、いじめ、不登校といった、困難な課題が出現した場面のみならず、日々の授業から、学級活動、特別活動、教育相談など、あらゆる場面で全ての生徒の自己実現を支える必要がある。そのため、生徒指導の目的を常に意識し、2軸3類4層による課題性と時間軸を捉えながら、教育活動全体で意図的・計画的に行うことが重要である。主人公は生徒であり、教師は生徒の多様な人生を自身の力で切り開かせ、個に応じた自己実現を果たせるよう支えていく必要がある。

参考文献

- 文部科学省 (2022), 「生徒指導提要」
 - 八並光俊・石隈利紀・田村節子・家近早苗 (2023), 「やさしくわかる 生徒指導提要ガイドブック」, 明治図書
 - 八並光俊・石隈利紀 (2024), 「これからの児童生徒の発達支持」, ぎょうせい
- 付記: 本稿の執筆分担はIが藤川, II~IVが藤川・永浦である。

『教育への扉』竹谷出版学術ジャーナル

第4巻, 第4号

発行日: 2025年2月28日

発行元: 竹谷出版 (竹谷教材株式会社出版事業部)